

雛飾りに
不思議な魅力を
感じて

青柳 Aoyagi Yuriko 百合子さん



雛飾りでまちおこし

全 国各地に伝わる雛飾り。北海道ではあまり馴染みがありませんが、これを広めようとしている方がビトエに住む青柳百合子さんです。今も昔も、子どもたちへの変わらない愛情を表現した雛飾り。この気持ちをもちおこしに活用できないかと奮闘中です。

江戸時代の頃、雛人形はとても高価で、庶民には高嶺の花でした。しかし、生まれてきた子どもの幸せを願う気持ちはみんな一緒。そこで、お母さんやおばあちゃん、近所の人たちが端切れを持ち寄り作ったのが「雛飾り」です。20年ほど前にこのことを知り、自分でも作品作りに挑戦しましたが、型紙などもなく苦労していました。昭和初期、義母は学校の裁縫で、小物細工作りを習い、厄払いの意味のある「身代わり猿」を作っているも身につけていたと言います。昔の生活では、針と裁

縫は今以上に重要な技能だったんでしょうね。ますます興味がわいて、伊豆、稲取町の「雛のつるし飾りまつり」を幾度も訪問し、その作り方や型紙を教えてもらいました。稲取あたりではこの伝統工芸が復活し、雛祭りの季節には町中に飾られています。雛飾りを巡る観光バスもあるくらい、全国からの訪問者がいるんです。

雛飾りには不思議な魅力があります。子どもの幸せを願い、古くても大切な着物や帯を切り分けて作るのです。また、母親や叔母さんの着物で作ったものは、形見のような思いが宿ります。お世話になった親戚や近所の方々に、これまで作った雛飾りを、お礼に渡したところ、大変喜ばれました。雛飾りを作っていることが縁でいろいろな方とも出会えました。当別町でも資料館やお店で飾ってもらうと地域の話づくり、まちおこしになるのではと思います。これを作りたいと言う方も多いので、教

室も始めました。

ビトエに移住してきたのは6年前。出身は上湧別町（現、湧別町）で、札幌市内で建材会社に勤務していました。主人ともども田舎の育ちですから、仕事のかたわら花や畑がやりたくて、20年間も永住の地を探していたんです。そこへ同僚から「花の町当別」を聞き、ビトエに来てその自然の素晴らしさに感激、すぐに家を建てる計画に移りました。農業者の認定も受け、現在は7反の畑で花や野菜を作っています。あこがれだった農作業や雛飾り作りなど、充実した毎日を送れるのは、この地域の素敵な環境と人にめぐり合えたからだと思います。

青柳さんはビトエでの暮らしをブログで紹介しています。

(<http://yuriko-garden.seesaa.net/> または ガーデン誕生日記で検索) 町民ポータルサイトの外部ブログからも見られます。(1月9日取材)